

終わりの、その先へ

羽黒アキ

平成二九年四月二九日

あらすじ

宇宙の終焉が迫る中、その終焉を回避するべく一隻の宇宙船が建造された。その宇宙船の搭乗員に抜擢された男と、宇宙船の物語。

登場人物

男 本作の主人公。宇宙の終焉を回避するべく宇宙船の搭乗員に抜擢される。しかし、素人。

船 本作の主人公その2。とある理由から主人公を乗組員に抜擢する。女性の少年声で。

科学者 男の幼馴染。船の開発者。性別不問。

利用規定

<https://null.0am.jp/script.php> を参照ください。

ニコ生、ツイキャス、声劇会議で演じられる場合は報告不要です。その他の場合はご一報ください。

録音・録画される場合は、完成品を頂けると非常に励みになるばかりではなく、場合によっては次作へのインスピレーションとなるため非常に喜びます。また、——居ないとは思いますが——

有償案件、営利及び宣伝活動の一環に用いられる場合は必ず事前にご相談ください。

作者連絡先

Skype: gioseffo

Twitter: @AKI_HAGURO

メール: aki.haguro@gmail.com

だいたい掲載順に気づきやすいです。

1 船出

男M 世界暦四二億六三七万二一一年——。ついにこの宇宙が終焉しゅうえんを迎えようとしていた。

俺たち人類は冬眠船や世代船で恒星系から恒星系を渡り歩き、この時まで生き残ってき
た。しかし、宇宙そのものの終焉しゅうえんからは逃げられない。

——ついこの時まで、俺はそう思っていた。

1・1 男の部屋

科学者 (フックしつつ) おーい、いるかー？ 居るんだろー？ 居るのはわかってるんだぞー！

男 毎度毎度えらい言われようだな。今開けるからちよつとくらい待て。

男、訪問客を招き入れる。

男 で、いきなりどうしたんだ？

科学者 お前、俺の学生時代の研究内容知ってたよな。

男 ……なんだよ藪やぶから棒に。えーつと……確かアレだろ？ 超光速がどうか。

科学者 それだけでも覚えてるならいいや。実はな、あれ、まだ研究してんだよ。

男 それで？

科学者 見せたいものがあるんだ。今日これから来れるか？

男 宇宙の終焉しゆうえんが近いってんで会社も開店休業だからな。いいぜ。

1・2 宇宙船

科学者 超光速の話、実は完成したんだ。

男 そりゃあすげえ！アインシュタインは今頃地団駄踏じだんだんでるだろうな。

科学者 地団駄踏む肉体があればな。

男 で、見せたいものってのはそれか？

科学者 そう！まさにそれなんだよ！

その前に超光速の原理について話しておかないとだな。

量子力学りょうしりきがくではミクロな粒子はあらゆる場所に確率的に存在してるんだ。今回の船はそれを応用したものだな。

男 おいおい、のっけから量子力学りょうしりきがくかよ。物理は齧かじった程度なんだから、お手柔らかに頼むぜ。

5 科学者 わかってるよ。で、今回のはだな、宇宙船がミクロな点に見えるほどマクロな世界にアクセスすることによって、宇宙船をあらゆる場所に確率的に存在させ、任意の点で実体化

することで超光速を実現するんだ。

男 おいおい、どんなスケールだよそりゃ。そりゃあ宇宙全体が地球くらいだとしたら、俺たちの存在なんて原子くらいのもものだろうけどさ。

科学者 もっとマクロな視点だな。宇宙の外からの。

男 宇宙の外！科学者が宇宙の外だって!?

科学者 ああ、そうさ。真面目に言ってるんだぜこれでも。すくなくとも宇宙船が素粒子そりゅうしに見えるくらいのマクロな視点にアクセスしなきゃならんからな。

男 そんなこと言ったって、どんな量子りょうしコンピュータでも無理だろうよ。

科学者 たった一つだけ、それが可能なものがある。

男 この世界で作ったコンピュータで、この世界の外にアクセスできるって？

科学者 いや、作ってはいない。が、たったひとつだけ存在する。いや、人数分は絶対に存在する。

男 おい、まさか……

科学者 カンがいいな。そう、俺達の脳だ。

意識についてこんな話を聞いたことはないか？ 「俺達の意識は、脳の中に存在するのではない。この世界に存在するのでもない。宇宙よりもっとマクロな場所で、クラウドストレージに保存されたファイルのような状態で存在している。俺達の脳はそここの世界

とを繋ぐ量子コンピュータで、そのマクロな世界から意識を随時ダウンロードしているのだ。」

実はな、これ、真理なんだよ。

男 じゃあ、何か……お前の宇宙船にはその……人間の脳を……

科学者 ああ。使わせてもらった。事故で死にかかっていた人間の脳を。

男 狂ってやがる……!! 超光速だかなんだか知らないが、やっていいことと悪いことがあるだろう!!

科学者 超光速が目的じゃない。超光速は目的のための手段だ。

男 じゃあ目的ってなんだよ……

科学者 この世界の終焉を回避すること、或いは先延ばしにすることだ。

男 だからって、生きた人間の脳を使ったんだらう?

科学者 そりゃあ、死んでたら使えないからな。

男 そんな……こんなことが許されるのか……終焉を回避するためとは言え……

船 そんなに悲観したものでもないですよ。

男 !?

間。

男 え、誰だ……

船 僕ですよ。わからないかなー。(えっちく)今、僕の中に……入って……きてるのに……。

科学者 気色悪い言い方をするな。

男 えーっと、ごめん。いっぱい説明して？

科学者 あー、つまりな。ここ、研究室じゃなくて、船の居住区画きょじゅうくわなんだ。俺たち居るの、もうその船の中に。

男 あ、うん……

船 いやあ、優しい方ですねえ。僕のことですんなに憤いきどおってくれて。でも、そんなに悲観したものじゃないですよ。死にかかった僕に第二の人生をくれて、しかもささやかな願いまで叶えてくれて。こうなって良かったと思いますよ。むしろ死にかかったお陰でこうなれたんだから、それすら良かったなんて。

男 理解が追いつかないんだけど、ちなみにささやかな願いつて何？

科学者 この船のパイロットな、お前なの。

男 え……

科学者 「え」じゃない

男 マジ？

科学者 マジ。

男 嘘ん。

科学者 ホント。

男 だって俺素人よ？ 量子力学りょううしりきがく以前きに軌道力学きどうりきがくも無理よ？ 計算とかほとんどできないよ？

科学者 そのへんは船がオートでやってくれる。ぶっちゃけお前は座ってモニタリングしてるだけでいい。故障診断も船が自動でやるし、画面の指示に従したがってればいいんだ。まー、俺も素人乗せるのはどうよって思うんだけど、船直々ていじきのご指名なんぞでな。

男 どういうこと？

船 そのままの意味ですよ。僕が貴方あなたを指名したんです。乗ってほしいなーって。

男 そんな軽いノリなの？

船 おもおも重々しければいいんですか？

男 いや、もういいや。

男M ーここうして俺は、宇宙の終焉しゅうえんを回避するため、宇宙の果てへと旅立つことになったー。

2 戦闘

2・1 衛星の裏側にて

船 後部レーダー警戒受信機に感^{かん}つ！火器管制レーダーの照射^{しやうしや}を受けてます！鍵回して！

男M どうしてこうなった――

2・2 回想・打ち上げ直後

船 ――つまり、確率的に存在させておいて観測によって任意の地点に出現するという原理なので、超光速は誰かに観測されていると出せないんですよ。

男 うん、それで？

船 とりあえず、衛星の裏側あたりでこっそりやっちゃおうかと。

2・3 再び衛星の裏側にて

男M ――その結果がこれかよ……。

男 鍵^オってこれか？AUTOからMENU^{エム・エヌ・ユー}に回すのか？

船 それマスコンキー！この状況で手動操縦^{そうじゆう}したいですか!?

男 いや、勘弁^{かんべん}願いたい。どれだ？

船 キーホルダーについてるやつ。取っ手がミサイルの形の！

男 これか。オートモードつと。

船 オツケー。つと、後方警戒レーダーに感。ミサイル2基接近。接触まで150秒！

男 まじかよ……。

船 むしろチャンス。爆発で相手がこっちを観測できないうちに、適当に飛びますから。

陽電子砲用意、発砲！

間。

船 弾……着！マーク・インターセプト。そして適当にテレポート！

男 適当でいいのか。

船 惑星の核の中にいきなり出現なんて逆にできませんから安心してください。この船を観測できないでしょ、そんな状態だと。

男 そういうもんか……。

2・4 宇宙の何処か

男 結局、衛星の裏側なら観測されないだろうと高を括っていたら、思いの外近所に異星人がいて、宙域侵犯で邀撃されたと。

11 船 いやあ、まさかそんな近所にいるとは……。

男 絶対楽しんでやってるだろ

船 どう取るかはお任せしますよ。でも、彼らに観測されずに跳ぼうと思っただらもっと遠くに行く必要がありましたし、対消滅とガンマ線に紛れて超光速で離脱できたわけですから、結果オーライじゃないですか。

男 そんなもんか。で、今どのあたりなんだ？

船 計算しますから、気長にお待ち下さい。

男 俺は待ってもいいけど、宇宙はそこまでもつのかなあ？

3 悲しき性さが

3・1 回想——出港前——

科学者 そうそう、これは俺からの餞別だ。せんべつ 持ってけ。雑誌『ペントハウス』。過去一年分用意した。一人旅だと溜まるだろ。

男 おま……えなあ……。まあいいや、貰つとくよ。さんきゅ。

3・2 船内

男 色々計算中たって、こっちは暇なんだよなあ……。

間。

男 うーん、こいつの世話になるのか……

船 何するんですか？

男 うわっ……。ビビらせんなよ……

船 あー、男ですもんねえ。溜まりますよねえ……。

男 軽蔑けいべつしたけりゃしてくれ……。

船 いいえ、むしろいいことなんじゃないですか？ そうやって発散してれば退屈しのぎのい

いレクリエーションになるじゃないですか。よければ、お相手しますよ？

男 お相手たったって……(後ろに立ってる人影に気づく)うわっ……。え……？

船 元が人間の脳なんで、体さえ用意できれば、こんなこともできるんですよ。

男 お、おう……

ってか、女の子だったの？

船 僕に性別はありませんよ。どっちのボディーでもいいんです。でも、どうせならと乗ってくれてる人が楽しんでくれるようなボディーにしてもらいました。

男 ふうん……。確かに可愛いよな、お前。

船 でしょ？乗組員のりくみいんは貴方だと、実はずっと前から心に決めていたので、貴方好みのボディーに仕立ててもらいました。

男 なーるほど……。お前って実は、すっげえ健気けなげなのな。

船 えへへー。

男 可愛いな、おい。

船 シよう？溜まってるんでしょー？

男 口調まで変わるのな。っていきなり脱がすかよ！

船 だってー、待ち切れなさそうだし？いただきまーす。(啜える音)

男 あうっ……

しばらくフェラを続ける船

船 もういいよね。こんなになってるし。挿れるね。

男 ……っ!!

船 ん……あぁっ……入って……くる……。

すっごい……熱い……

男の息遣いと船の喘ぎ声。

船 すっごい……幸せ……こうなれて……よかった……

男 ……も……イキそう……

船 いいよ、来て……。一緒に……イこう……

二人同時に絶頂を迎える。

3・3 船内・事後

船 スッキリできましたか？

男 その口調で言われると複雑になってくるなあおい。

船 またシようね

男 そうだな。

船 さて、現在地も特定できましたし、目的地まで一気に跳とびますよ。

男 おう、旅の目的はそれだもんな。

4 世界の果てで

4・1 世界の果てのその向こう

男 ここが、目的地？

船 ですね。一気に跳とんじやいました。

男 まさに宇宙の果てってやつか。

船 ちよつと違いますね。正確には宇宙の外です。

男 宇宙の外!?

船 ええ。

宇宙というものは二次元の媒体ばいたいに記録された情報のホログラムなんですよ。で、その記録媒体ばいたいが終りを迎えるから宇宙が終焉しゅうえんを迎えてしまう。それをなんとかしようとしてるんですから、宇宙の外側まで来ないと話が始まりません。

男 あー……そういうもんなのか。

男、辺りを見回す。

男 で、カセットテープにしか見えないものがそこにあるんだが……

船 あれが宇宙の情報を記録した媒体ばいたいですね。

男 俺たち、カセットテープの中に居たのか。

船 カセットテープに記録された情報だったんだ……が正解ですね。

男 なるほど、終わりかけてるな……。

船 あのカセットテープが終わったときが宇宙の終焉しゆうえんというわけですね。

男 終わらなきゃいいんだろう？

船 ええ。そのために貴方を乗組員のりくみいんにしたんです。

男 なるほどな。

……じゃあ、ここをこうして……。カセットテープってことはB面があるわけだから……こう、ここをこう弄いじって……できた！

船 さすが！

男 こんな時代にカセットテープに関する知識がある人間って、そりゃあレアだよなあ。

とりあえず、A面が終わったら間髪かんぱつ入れずB面が再生されるようにしておいたから、これでひとまず、これまでの宇宙の歴史と同じくらい、宇宙の寿命が伸びたわけだ。

船 そういうわけです。

男 なんか不安だから、B面に切り替わるのを見てから帰るか。みたところ、あとちょっとだし。

男 よし、切り替わったな。
船 帰りますか。

4・2 終わりの、その先へ

船 やっぱり、貴方にしてよかったです。

男 ん、ああ。カセットテープだもんなあ……。

船 でも、それだけが理由じゃないですよ。

男 へえ……。他にどんな理由があったんだ？

船 小さい頃よく遊んだ友達が一人居たでしょう？覚えてます？

男 あー！いたいた。セカンダリ・スクールに上がる時に引っ越して、それ以来会ってない

なあ。どうしてんだろ、あいつ。ってか、何でそんなこと訊くんだ？

船 覚えててくれたんですね。僕ですよ。

男 え？

船 密かに想いを寄せてたんですが告白できず終いで後悔してて……。そんな中、事故に遭っ
ちやいました、気づけば瀕死。で、死の淵で願ったんです。貴方と一緒にいたいと。そう

したら……叶っちゃいました。

男 え、いや、いきなり言われても信じられないっていうか……

船 よく遊んだじゃないですか。料理ごっこしたりして。

男 料理漫画にハマってたからな……

船 で、本物の食材使って遊んで、後で一緒に怒られた。

男 え、マジでお前、あいつなの？

船 そうですよ。だから、溜まってたモノを発散するためだとしても、一つになれたときは本当に嬉しかった。

男 そう……だったの……か……

船 だから言ったでしょう？「またしようね」って。あれは、僕の願望でもあるんです。

男 おう……

船 さて、種明かしもしたところですし、帰りますか？

男 せっかく遠くまで来たんだ。どうせならこのまま、ハネムーンと洒落^{しや}込^れむのもいいんじゃないか？

船 それって……

男 俺も好きだぜ。正直、子供の頃のこととはそこまで覚えてない。でも、今のお前が、俺は好きだ。

20 船 ありがとう……

終劇

あとがき

初めましての方は初めまして、そうでない方はお久しぶりです。日吉暁人です。

SFを書いてみようと思いついたものではありません。まずはじめに思いついたのは、宇宙船の設定でした。そして、本人は宇宙船の1部品になったことについて前向きに受け止めている。そんなシーンが浮かんで、一生懸命形にしたものです。拙い出来ですが、楽しんでいただけましたら幸いに存じます。

「演じてみた」報告は不要ですが、頂けると励みになります。また、演じた際の録音などを頂けると、飛び上がって喜ぶばかりか、それ自体がアイデアの源泉になったりもします。

最後になりましたが、この本に対する誤字脱字、読みにくい、つまらない等のご指摘は、左記にお願いします。

Skype: gioseffo

Twitter: @AKI_HAGURO

メール: aki.haguro@gmail.com